

論文誌『自然言語処理』投稿の手引き： 第30回年次大会 編集委員会ランチタイム企画

浅原 正幸^a・内山 将夫^b・宮尾 祐介^c・荒瀬 由紀^d

1 はじめに

編集委員会は、論文誌『自然言語処理』の活性化を目的として、言語処理学会第30回年次大会のランチタイム企画で「論文誌『自然言語処理』投稿の手引き」を実施した。図1の論文誌『自然言語処理』投稿のプロセスについて順に説明しながら、当日に示した内容を報告する。なお、この内容は2024年6月時点のものであり、今後変更される可能性がある。

2 原稿を書く

原稿を書くにあたり、原稿の種類を決める必要がある。本論文誌には「論文」「技術資料」「解説論文」の3つの原稿の種類がある。「論文」はさらに一般的な研究・開発成果を発表する「一

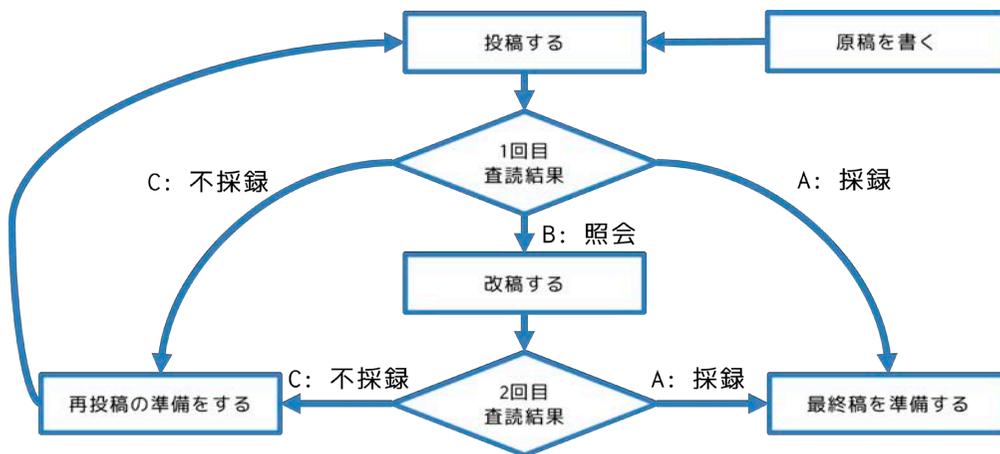


図1 論文誌『自然言語処理』投稿のプロセス

^a 国立国語研究所・総合研究大学院大学
^b 情報通信研究機構・先進的翻訳技術研究室
^c 東京大学大学院情報理工学系研究科
^d 東京工業大学情報理工学院

般論文」と、システム開発に関する成果を発表する「応用システム論文」に分けられる。「技術資料」はソフトウェア・言語資源などの特徴や評価など、読者に有益な情報を提供する報告である。「解説論文」は関連する分野についての文献を独自の視点から調査した論文である。また、これらとは別に編集委員会・理事会からの依頼に基づく「学会記事」がある。

原稿は、 $\text{L}^{\text{A}}\text{T}_{\text{E}}\text{X}$ のスタイルファイルを利用して製版する。執筆時には、Wordのサンプルファイルも提供されており、最終原稿を編集委員会が $\text{L}^{\text{A}}\text{T}_{\text{E}}\text{X}$ で組版する。1ページ目に標題・著者名・概要・キーワードを記載するほか、既発表文献がある場合には明記する。 $\text{L}^{\text{A}}\text{T}_{\text{E}}\text{X}$ に含まれている環境 (picture, tabular 環境など) 以外で書かれた図表は別途添付する必要がある。また図表は色覚多様性への配慮のために白黒印刷して理解できるようにすること。参考文献リストに日本語文献が含まれている場合には、ヘボン式ローマ字を付与する必要がある。

研究の新規性を評価するにあたり、先行研究に対する考え方を示す。論文誌、口頭発表、プレプリントかどうかにかかわらず、投稿時より3ヶ月以上前のものは先行研究とみなす。ただし、著者以外による公表文献については、次のように柔軟に考える。まず、先行研究が3ヶ月以内のものであっても、論文内で関連研究として言及・議論することが望ましい。一方で、3ヶ月以上のものであっても、あまり他の論文で参照されていない場合には、先行文献調査が不十分と一律にみなすのではなく、ケースバイケースで判断する。

著者による公表文献は二重投稿・二次投稿の問題を考慮する必要がある。一般的に投稿期間に時間的重なりがある二重投稿は、研究倫理の観点から禁止されている。特に国際会議論文においては、国際会議側が二重投稿を制限している場合があるので、国際会議の Double Submission Policy で問題ないことを確認したうえで、国際会議における発表が終わった後に投稿するのが望ましい。本論文誌は、投稿期間に時間的重なりのない二次投稿については、限定的に認めている場合がある。詳しくは浅原 他 (2022) を参照されたい。

ランチタイム企画では、特に「国際会議論文とジャーナル論文の違い」について説明した。まず、前提として国際会議論文をスタイルファイルのみ変えてそのまま投稿することは研究倫理の観点から望まれていない。査読者のなかには既出の国際会議論文と一言一句同じ投稿論文を査読しない方もいるほか、他団体や所属組織によっては「自己剽窃」とみなされる危険がある。一方で、競争率の高い英語で書かれた国際会議論文を日本語に訳したうえで和文ジャーナル誌で発信することは、研究の裾野を広げるという観点から重要であると言語処理学会では考える。さらに、国際会議におけるコメントを反映させて英語で拡張版を投稿することも重要であると考え。執筆においては、日本国内の言語処理学会会員が読者層であることを想定して改訂することが望まれる。また、国際会議論文と本論文誌の論文は査読のスタンスが異なることを示した。国際会議論文は主張をそのまま掲載するのに向いている一方、減点方式で評価され採択・不採択が決まる。本論文誌の査読においては、採録に適する論文であるかどうかを審査し、査読者のコメントに基づき修正することにより、よい論文に仕上げられる。

3 投稿する

論文を投稿する際には、以下の3つの項目を提出する。

〔提出項目 i〕 投稿論文情報として、論文の情報（原稿の種別・著者・表題・概要）・代表著者の連絡先・すべての著者の氏名と所属（COI の判断に用いるため複数の所属がある場合はすべて書く）・言語処理学会会員の著者 1 名以上の会員番号（著者のうち少なくとも 1 名が本学会の会員であること）。

〔提出項目 ii〕 投稿論文チェックリスト（2024 年 6 月改正）。二重投稿・既発表であるかどうかの確認、モノクロ印刷で理解可能なこと、データセットやツールの利用規約の確認、倫理的なリスク、AI アシスタントの利用などについて。

〔提出項目 iii〕 査読用原稿 pdf ファイル。

但し、提出物は今後変更される可能性があるため、投稿前に最新の言語処理学会論文誌原稿執筆案内を確認すること。

4 査読

ランチャタイム企画では、論文誌の査読がどのように進むかについて、図 2 を示しながら説明した。査読において、著者は自身の情報について編集委員・査読者に開示される。編集委員会は投稿があり次第、担当編集委員（非開示）を決定し、査読者 2 名（非開示）に査読を依頼す

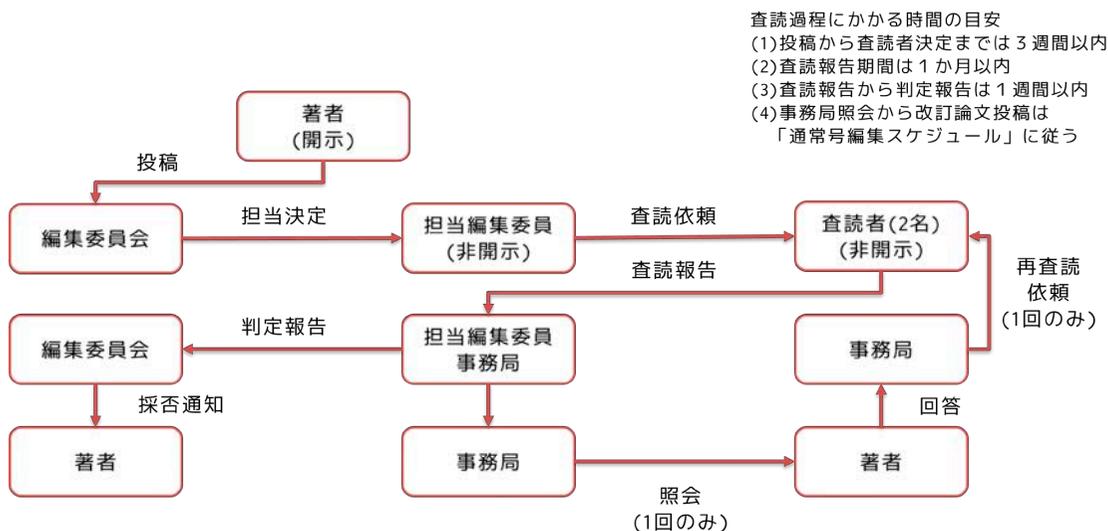


図 2 論文誌『自然言語処理』査読のプロセス

る。投稿から査読者決定まで3週間以内、査読者による査読報告期間は1ヶ月以内、査読報告から担当編集委員による判定報告は1週間以内を目指している。

通常号については、論文投稿期間に応じて、結果通知(1回目)・改訂論文投稿期限・結果通知(2回目)・最終原稿提出期限・出版号の目安が「通常号編集スケジュール」として論文誌ウェブページに示されている。結果通知(1回目)から改訂論文投稿までの照会期間は通常1ヶ月だが、やむを得ない場合は、1回に限って、1ヶ月の著者からの延長願い(つまり改訂論文投稿期限から最大1ヶ月まで)に応じる。その際は編集スケジュールが順次後ろにずれる可能性がある。なお、1ヶ月を超えての延長・再延長願いには応じない。そのような場合は、通常の査読過程を中断して論文の返却となる。

2023年1月1日以降に投稿された論文については、剽窃検知ツール「Similarity Check」を利用して、先行研究との類似性を確認する。剽窃検知ツールの判定結果は、引用すべき文献の確認のために担当編集委員・査読者が利用する。

査読においては、「会員の関心」・「信頼性」・「構成と読みやすさ」のほか、原稿の種別ごとに「有用性」・「新規性」の観点から評価する。「一般論文」については、学術的、工学的、あるいは社会的に有用であるかとともに、従来の研究と比較してこの論文の位置づけを明確にしておき、新しい知見が得られているかを評価する。「応用システム論文」については、構築されたシステムが、現実的問題へ対応できていることを可能な限り客観的に示す場合に加点する。定量的に評価できない場合でも定性的評価を示すことにより有用性を示すことが求められる。新規性については、既存の組み合わせや統合であっても、組み合わせの新しさ、システム全体の新鮮さ、設計コンセプトの新しさ、設計・開発されたシステムで得られた知見の新しさ、などを新規性の対象とする。その他、理論上は問題にならないが、実用システムを開発するには解決しなければならない問題、およびその解決方法と評価についても加点する。「技術資料」については、新規性は問わず、有用性を評価の主項目に据えて評価する。学術的、工学的、社会的に有用であるかを評価する。「解説論文」については、有用性の観点として、先行研究が十分に調査されているか、必要な文献が挙げられているか、当該領域の技術等の全体像が把握できるか、記述内容が具体的で信頼性のあるものとみなされるかを評価する。さらに新規性の観点として、新しい視点・観点でまとめられているかを評価する。また、いずれの原稿の種別においても、論文中で利用したデータやプログラム等が公開されていることは必須ではないが、著者らが構築したコーパスやプログラム等が公開・共有されている場合には、有用性・再現性・信頼性の観点から加点する。本論文誌は図3に示す論文査読倫理綱領を策定しており、担当編集委員・査読者はこれに従う。

査読結果は、「A採録」「B照会」「C不採録」のいずれかである。「B照会」は1回のみで、著者に照会して回答または修正などを求め、改めて査読を行う。「B照会」は「B1条件付き採録」「B2照会后判定」の2種類ある。「B1条件付き採録」において、照会事項は論文の本筋に影響

1. 論文査読の公平性, 迅速性, レベルは学会の評価に直接つながるものであるから, 以下のことを常に念頭におき, 論文の査読, 判定をしなければならない。
2. 論文の主張する内容が査読者の立場考え方と相入れない場合でも, その前提, データ等から妥当に帰結できるものであると認められる場合は, それを是認すること。
3. 自分が全知でないことをよく自覚し, 「疑わしきは罰せず」の立場で論文をよむこと。
4. 論文に対してコメントするときは, その論文がコメントによって良くなり, 著者がより良い研究者となって行ってくれることを念じて行うという態度を忘れないようにすること。
5. 数学的, 論理的な内容のものだけが科学的あるいは学問的な論文とは限らない。数学的, 論理的記述によって表面的にはしっかりした論文のように見えても内容のほとんどない論文もある。要は, どのような新しい内容を持っているかで判断すべきだろう。既知の方法論を使った場合でも新しいデータやソフトウェア, システムを作ったという場合もあり, それが価値あるものであれば認めるべきである。
6. 論文の査読は迅速に行うのが査読者の責任であると認識すべきである。一日も早く博士号を取得し一人前の研究者の仲間入りをしたいと思って日夜研究を行い論文を投稿してくる人も多いのである。この学会の設立は自然言語処理の研究者人口をふやし, この分野を大きく育ててゆくことに一つの目的があるのだということを忘れずに, 迅速に公正に査読することがその目的のために貢献していることになると認識して, 査読作業を行うことが大切である。

図3 論文誌『自然言語処理』論文査読倫理綱領

しない部分的かつ軽微なものに限る。「B2 照会后判定」は, 誤り, 論旨不明, 疑問点, 論文としての形式不完全, 冗長, 追加記述の要など, 照会により改善の見込が十分あり得る場合に限る。「C 不採録」は, 当学会の分野ではない, 本質的な誤りがある, 内容の程度が低く論文としての新規性・重要性がないなどの不採録理由を付して, 著者に返戻する。

5 採録時・不採録時

採録時は最終稿を編集委員会に提出する。その際に英文概要などについて学会の英文校正サービスを利用することができる。採録論文の著作権は原則として言語処理学会に帰属するものとする。採録論文のライセンスは「クリエイティブ・コモンズ 表示 4.0 国際 パブリック・ライセンス (CC BY 4.0)」とする。なお, 言語処理学会は言語処理学会が著作権を保有していることを理由としての, 卒業論文・修士論文・博士論文への研究成果の再公開についての異議申し立ては行わない。

不採録時には, 「再投稿」が可能である。再投稿時には, 前回の原稿からどのように改定したかなどを説明する「再投稿説明書 (書式自由)」を添付する。再投稿説明書の内容が, 採録に至らなかった理由を解消していないと編集委員会が判断した場合には, 通常の査読過程を経ずに返却することがある。担当編集委員・査読者は, 初回投稿時と再投稿時とで同じ方にするか異なる方にするかを希望することができる。論文誌査読サイクルの都合上, 同じ方を希望しても異なる方になる場合がある。

6 おわりに

言語処理学会第30回年次大会に際し、編集委員会はランチタイム企画として「論文誌『自然言語処理』投稿の手引き」を実施した。本稿は当日説明した内容を報告するとともに、2024年6月時点における論文誌への投稿方法についてまとめた。大学・研究機関・企業などの研究成果を発表する場として、ぜひ論文誌『自然言語処理』への投稿を検討されたい。また、前号の巻頭言(宮尾 2024)もご一読いただきたい。

また、編集委員会では年4回の通常号の発行とは別に、随時特集号を発行している。特集号の企画については、会員各位による提案を歓迎する。

参考文献

- 浅原正幸, 吉田光男, 宮尾祐介, 内山将夫 (2022). 許容される二次投稿. 自然言語処理, **29** (3), pp. 1037–1042. [M. Asahara et al. (2022). Kyoyosareru Nijitoko. Journal of Natural Language Processing, 29(3), pp. 1037–1042.].
- 宮尾祐介 (2024). 会誌『自然言語処理』のご案内. 自然言語処理, **31** (2), pp. 326–327. [Y. Miyao (2024). Kaishi “Shizengengo Shori” no Goannai. Journal of Natural Language Processing, 31 (2), pp. 326–327.].

略歴

- 浅原 正幸：国立国語研究所・総合研究大学院大学教授。
内山 将夫：情報通信研究機構・先進的翻訳技術研究室室長。
宮尾 祐介：東京大学大学院情報理工学系研究科教授。
荒瀬 由紀：東京工業大学情報理工学院教授。